

【漁況】 [マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2019年は9万7千トンとなりました。

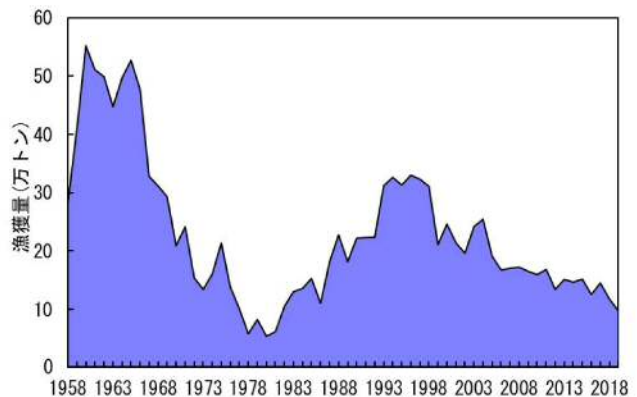


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2022年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に天草西沖、串木野沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に串木野沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に甑西、縄瀬でマアジ豆、小、中（1～3歳魚：2019～2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に内之浦沖、立目沖、野間池沖でマアジ小、豆（1～2歳魚：2020～2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に野間池沖、内之浦沖、志布志沖、立目沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に立目沖、内之浦沖でマアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,344トンの水揚げで、前年の80%及び平年の113%でした。

3. 県内の2022年4～6月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆（1歳魚：2021年生まれ）

来遊量：前年を下回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジの2021年生まれ主体となることが予測され、前期2～3月の漁獲量と今期の漁獲量に強い正の相関があり、回帰式をもとに予測すると好調だった前年を下回り平年並となると考えられます。

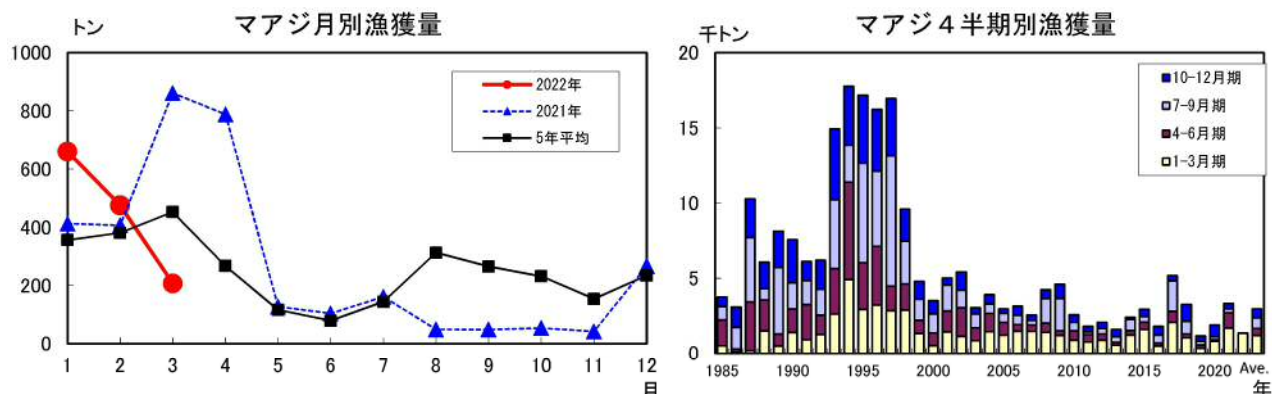


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2022年3月23日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、2019年は45万トンとなりました。

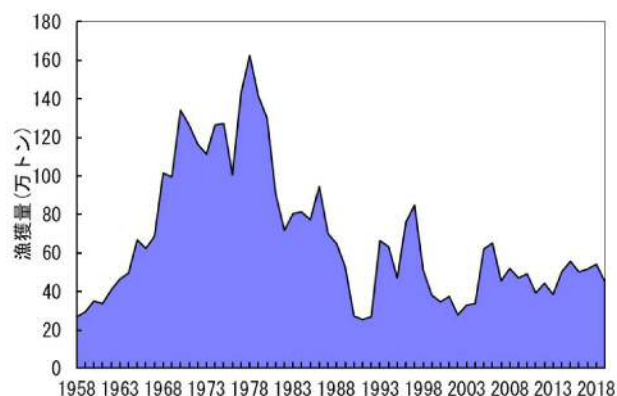


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の2022年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に男女群島、天草西沖でサバ類中、小、豆（1～3歳魚：2019～2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に縄瀬、串木野沖、五島、男女群島でサバ類小、中（2～3歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に縄瀬、甑西、男女群島でサバ類小、中（2～3歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に野間池沖、立目沖、五島下でゴマサバ豆、中小（1、3歳魚：2019、2021年生まれ）、マサバ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に立目沖、志布志沖、野間池沖でゴマサバ豆～中小（1～3歳魚：2019～2021年生まれ）、マサバ豆（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に津倉、宇治でゴマサバ中、大（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で3,257トンの水揚げで、前年の66%及び平年の44%でした。

3. 県内の2022年4～6月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆～大（1～5歳魚：2017～2021年生まれ）

マサバ中、中小（3～4歳魚：2018～2019年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

3月末に志布志沖、内之浦沖でマサバ中、中小のまとまった漁獲があり、直近の状況をふまえるとゴマサバ豆～大とマサバ中、中小が漁獲の主体となることが予測されます。

前期の漁獲量と今期の漁獲量に強い正の相関があり、回帰式をもとに予測すると前年並で平年を下回ると考えられます。

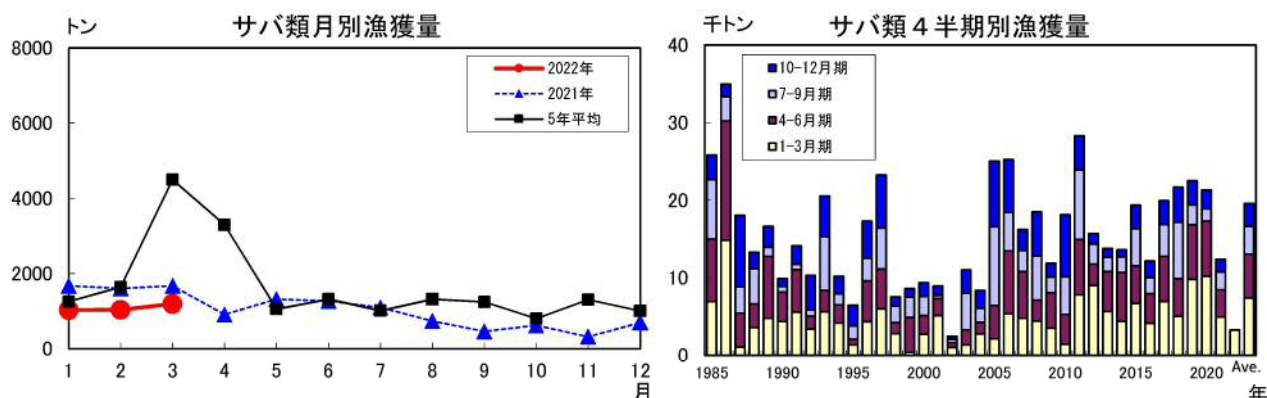


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年3月23日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2019年には56万トンとなりました。

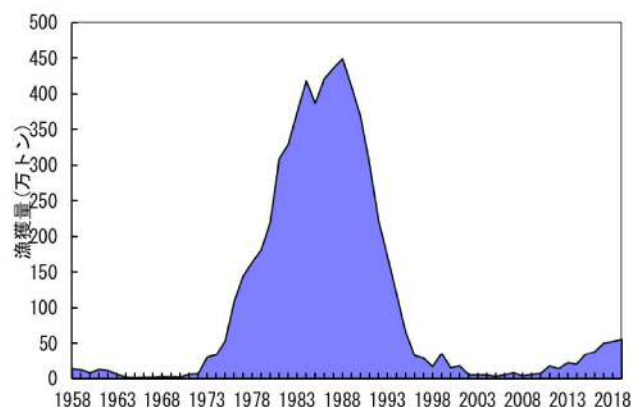


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の2022年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、2月に串木野沖で小規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、12トンの水揚げで前年の52％、平年の27％でした。

北薩海域の棒受網では、水揚げはありませんでした。

3. 県内の2022年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月の中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）主体で、5月以降は小羽（0歳魚：2022年生まれ）主体

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

産卵親魚と考えられる中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）の前期の漁獲は低調に推移し、漁場への来遊が見られないことから、今期の漁獲主体となる小羽（0歳魚：2022年生まれ）の来遊量は、前年・平年を下回ると考えられます。

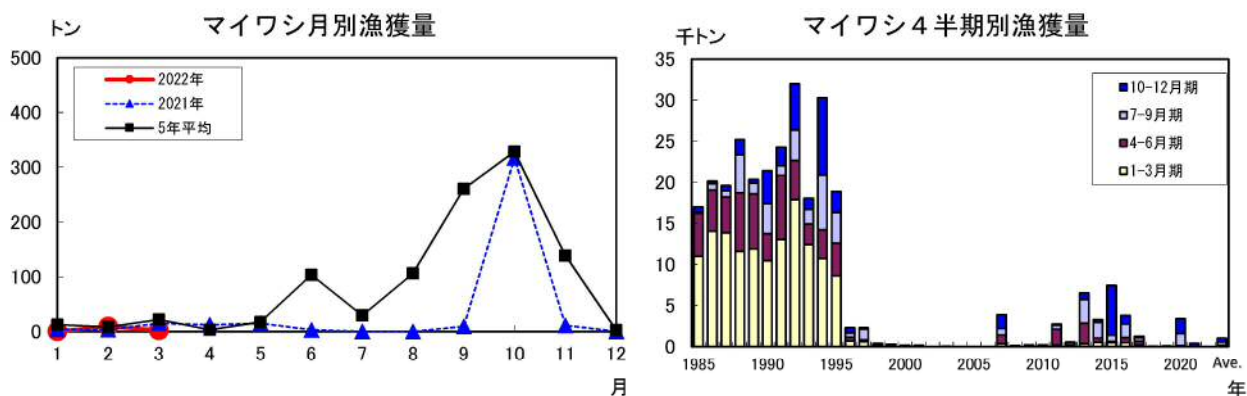


図 マイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2022年3月23日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりましたが、2019年は5万4千トンと大きく減少しました。

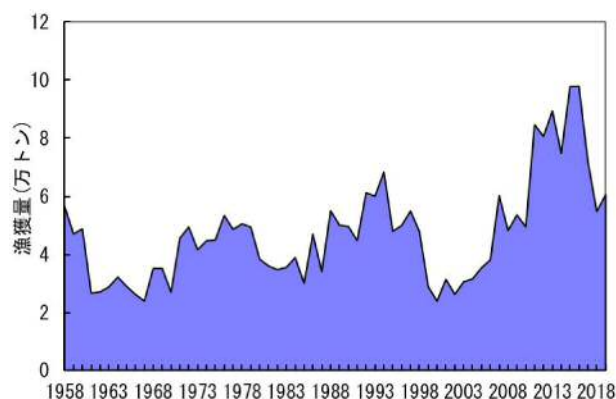


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2022年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、1月に天草沖、縄瀬、甕島周辺、期を通じて串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、3月に立目崎沖、期を通じて野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）主体に967トンの水揚げで、前年の236%及び平年の176%でした。

北薩海域の棒受網では、1トンの水揚げで、前年の43%及び平年の2%でした。

3. 県内の2022年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月は中～大羽（1歳魚：2021年生まれ）で、5月以降は小羽（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況を基に予測すると今期は、前年を上回り、平年並みと考えられます。

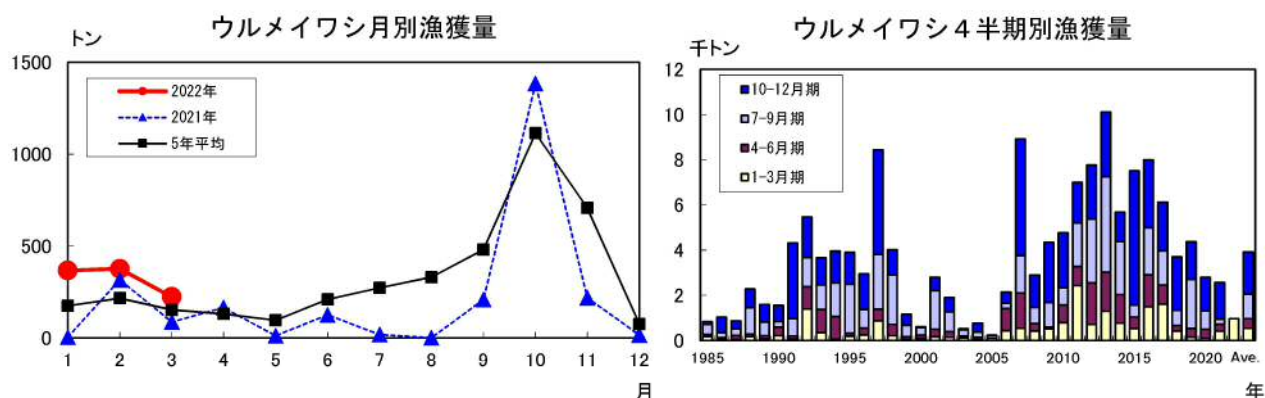


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2022年3月23日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2019年は13万トンとなりました。

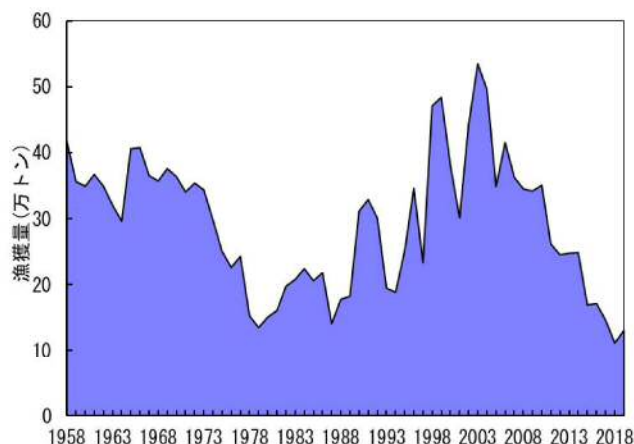


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2022年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、1月に八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、16トンの水揚げで、前年の14%、平年の8%でした。

北薩海域の棒受網では、35トンの水揚げで、前年の58%及び平年の24%でした。

3. 県内の2022年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となると考えられる小～中羽（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）は前年の秋～冬期発生群と推測されます。前期の漁獲は低調に推移していることから、今期は前年・平年を下回ると考えられます。

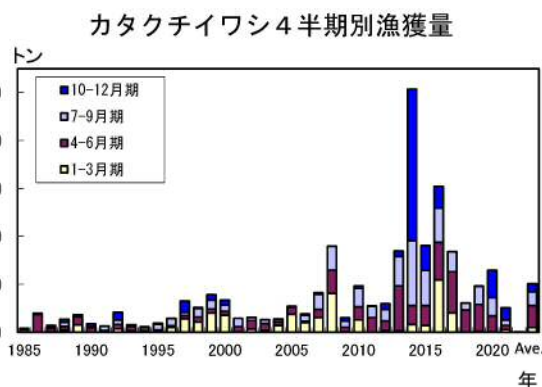
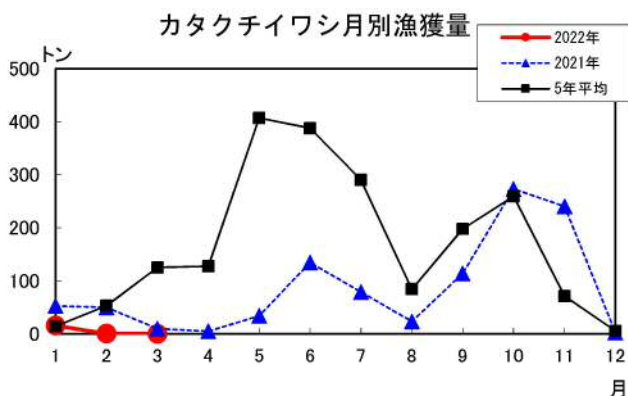


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2022年3月23日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

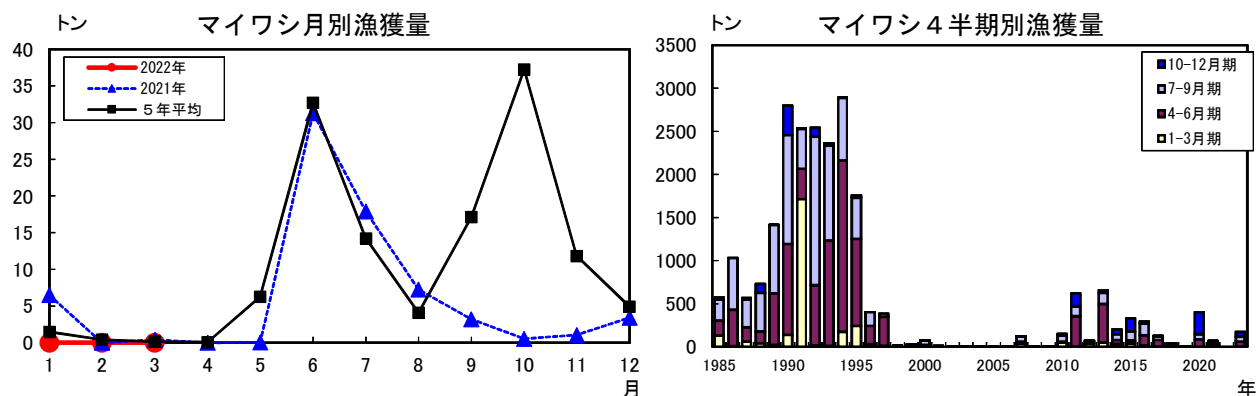


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

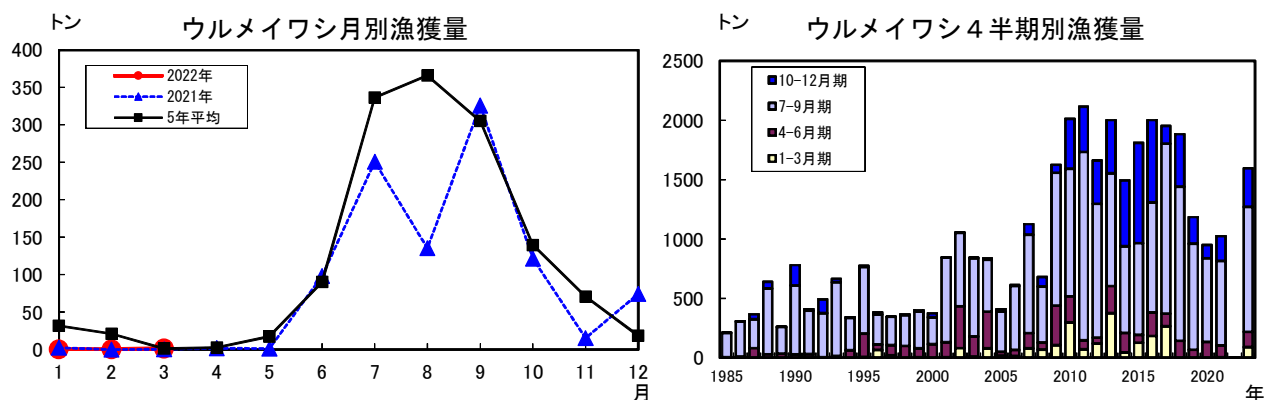


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

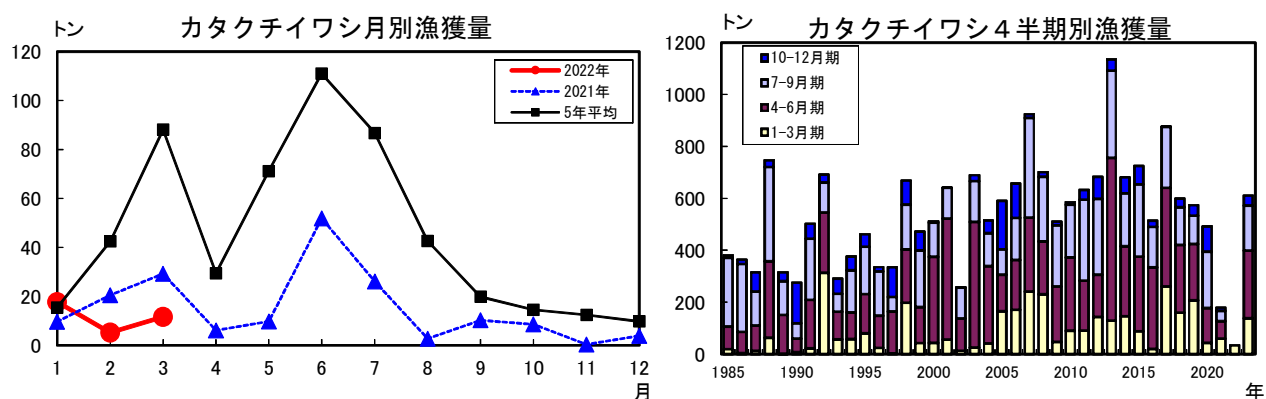


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2022年3月23日までの水揚量を使用

[ムロアジ類（参考：漁況経過のみ記載）]

〈クサヤモロ，ムロアジ，モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は，1990年の21,700トン进行ピークに急減し，1994年以降は1,500トンから5,000トンの間での推移しており，2021年は3,017トンとなりました。

2. 2022年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では，臥蛇島，種子島東，屋久新でクサヤモロ中小，小，豆主体の漁場が形成されました。期全体で540トンの水揚げで，前年の109%及び平年の92%でした。

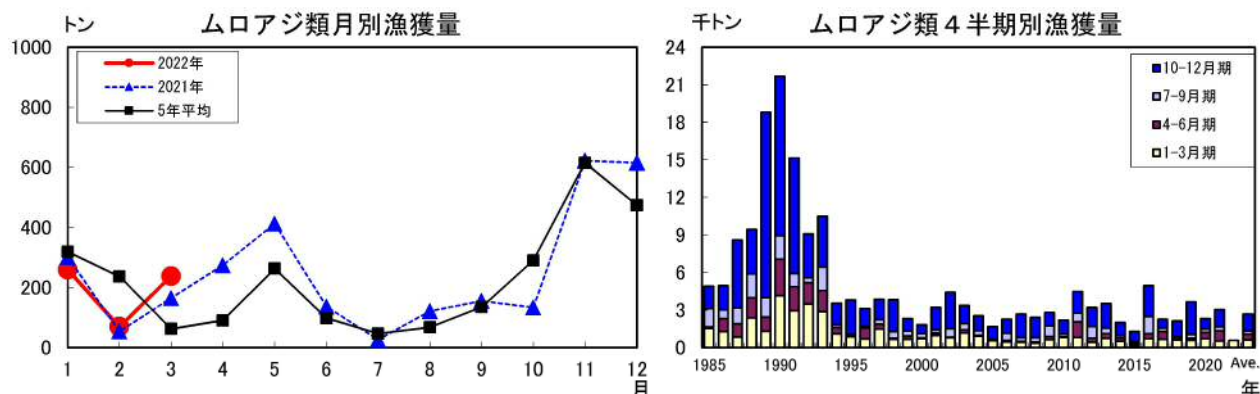


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2022年3月23日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は，1989年の5,300トン进行ピークに一旦減少し，1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり，2007年には700トンとなりました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移していたものの，2021年は416トンと減少しました。

2. 2022年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では，志布志沖でオアカムロ豆主体の小規模な漁場が形成されました。期全体で19トンの水揚げで，前年の83%及び平年の7%でした。

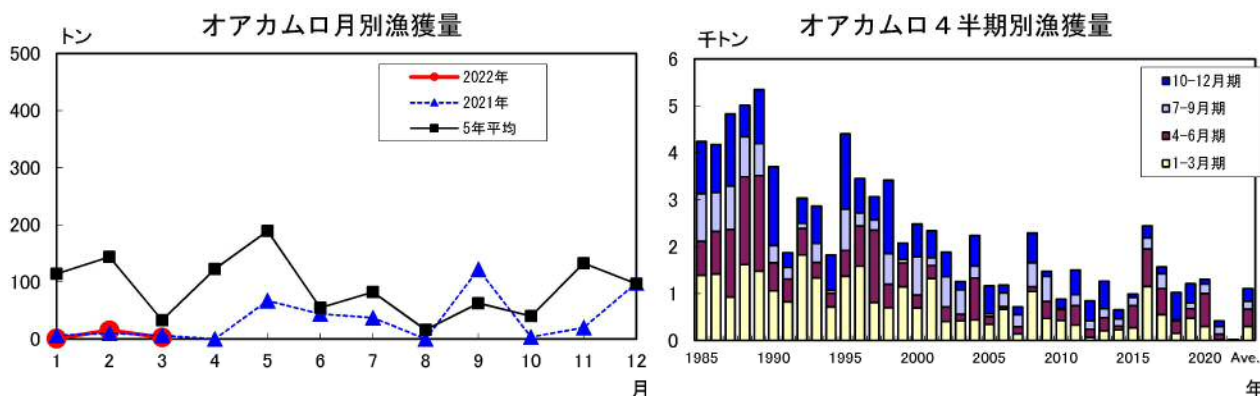


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2022年3月23日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987 年から 1989 年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000 年から 2003 年に再度ピークを迎え 2003 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが、2004 年以降は低調に推移し、2021 年は 176 トンとなりました。

2. 2022 年 1 ～ 3 月の漁況の経過

4 港計のまき網では、志布志沖、野間池沖、串木野沖でマルアジ小、豆主体に漁場が形成されました。期全体で 102 トンの水揚げで、前年の 131 % 及び平年の 71 % でした。

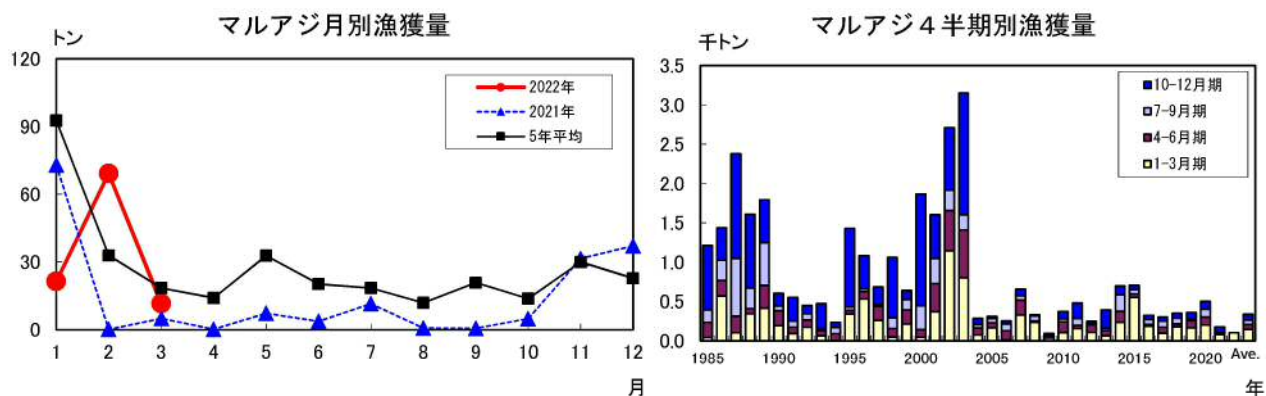


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，2022 年 3 月 23 日までの水揚げ量を使用